



TITLE:

7.溶液中の色素の発光スペクトルの緩和現象について(大阪大学大学院理学研究科物理学専攻,修士論文題目・アブストラクト(1987年度)その2)

AUTHOR(S):

西, 伸彦

---

CITATION:

西, 伸彦. 7.溶液中の色素の発光スペクトルの緩和現象について(大阪大学大学院理学研究科物理学専攻,修士論文題目・アブストラクト(1987年度)その2). 物性研究 1988, 50(6): 1099-1099

ISSUE DATE:

1988-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/93308>

RIGHT:

の断面積比を測定し、この実験結果を説明するために、 $[\text{NaK}]^{**}$  のポテンシャルを用いたモデルでの計算を行った。またリドベルグ原子は極性分子との衝突で非常に大きな反応断面積を持つことを Na 原子と  $\text{NH}_3$  分子との衝突により観測し、その断面積を求めた。

## 7. 溶液中の色素の発光スペクトルの緩和現象について

西 伸 彦

溶液中の色素は、まわりを多くの溶媒分子に囲われている。その為色素の電子準位は、それらとの相互作用によって絶えず変動している。その変動は、多くの溶媒分子の総和であることから、確率過程として、取り扱えるものと考えられる。レーザー用色素ローダミン 6G のエタノール溶液を試料とし、その吸収、発光スペクトルについていくつかの実験を行った結果、独立な 2 つの 2 次関数型ポテンシャル上で、確率密度関数が Gauss 型の時間発展をするという model を用いることによって、螢光スペクトルの時間発展、低温での発光スペクトルの励起波長依存性、吸収スペクトルのスペクトル巾の  $\sqrt{T}$  依存性等の現象を統一的に理解することができた。

## 8. Fe—Mn—C 合金の磁場誘起マルテンサイト変態

筈 見 公 一

Fe—Mn—C 合金は組成を変える事により常磁性や反強磁性を示す。これらの系に対して強磁場を加えて磁場誘起マルテンサイト変態の研究を行ない、変態に及ぼす磁性の影響について調べた。

その結果、母相が常磁性の場合における磁場効果は静磁効果だけであり、強磁性の場合と同様に解析できる事が判った。しかしながら母相が反強磁性の場合にはこれまでの解析では説明ができない結果が得られた。この結果は、反強磁性相互作用による short range order の